



リーダーズインタビュー
OECD 教育局長
アンドレアス・シュライヒャー氏
OECD 学生閣僚会議
シリコンバレーツアー
TeaTimeHackathon 事前勉強会

■ GCL リーダーズインタビュー シュライヒャー氏

研究、ビジネス、さまざまな分野のリーダーたちへのシリーズ企画・リーダーズインタビューです。2回目の今回は、OECD（経済協力開発機構）教育局長のアンドレアス・シュライヒャー氏へのインタビューです。

シュライヒャー氏は国際的な学習到達度調査（PISA*^{注1}）や教員・教授・学習に関する調査（PIACC）などの国際比較事業を立ち上げ、教育政策の分析や提言を行うことで、これまで各国ごとで完結しがちだった教育分野のグローバル化を進めています。



—— 今日リーダー像

リーダーに求められる重要なポイントは3つあると考えています。1つ目は、目標達成への強い情熱をもつこと、もしくは、自分が何に対して情熱を持っているのかということをしっかり把握することです。2つ目は、自信をもつことです。もちろんはじめは、全てを完璧にこなす必要はないと思います。しかし、目標を達成できるという自信があれば、自ずと目標に近づくことができるでしょう。3つ目は、社会的意義です。どのように世界に貢献できるのかを考えることが大切です。今日のリーダーとは、人々をコントロールしたり、大きな物や資金を管理したりすることではないのです。

—— 全ての始まりはアイデア

以前と比べるとずっと容易にリーダーになれる時代になりました。昔は、リーダーになるために、大きな組織や労働者、資金など必要なものがたくさんありました。しかし、今日では、本当に素晴らしいアイデアさえ持っていればリーダーになることができます。全ての始まりはアイデアなのです。

PISAの開発もアイデアから始まったよい例です。私がPISAを発案した時は、ただのコンセプトに過ぎませんでした。実現のために必要な資金も人材もいませんでした。それでもアイデアがあれば、あとは全て伴ってくるのです。

—— 共に成し遂げる

リーダーに必要なファクターは、どのくらいの方があなたと一緒に働き、支え、手助けしたいと思ってくれるかです。魅力的なビジョンをもってさえいれば、人材はついてくるでしょうし、反対に、そうしたビジョンがなければ、リーダーとして成功できないでしょう。これまでに私が関わった仕事を振り返ると、一緒に働いてくれた人たちがいなければ、どれ一つとして成し遂げることができなかったと思います。

—— 多くのステークホルダーとどう向き合うのか

リーダーは、多様な考え方を理解することも求められます。柔軟な思考力を持ち、まずは、意見や価値観を共有できることに感謝しましょう。そして、それぞれの最優先事項や立場、文化的背景など、全てを理解しようと努力してください。理解することができたならば、どのようにプロジェクトをまとめあげればよいのかは自ずと明白になるはずです。

PISAは世界70カ国以上の国々と進めているプロジェクトですが、パリのOECD本部の中に座っているだけではなく、世界中の関係国との良好な関係を保つことが大切と感じます。

—— どんな学生だったか

大学生の時は、教育分野とは全く異なる物理学を学んでいましたので、今の私の姿を想像さえしていませんでした。リーダーに学問分野は関係ありません。未来に目を向け、そのチャンスが来た時に挑戦するのです。

私の大学時代も、今の大学生にとっても、大学で将来の自分の仕事そのものを学ぶことは難しいでしょう。私は、どのように世界に貢献することができるのかということを漠然と考えていました。

また、高校時代はドイツの青年管弦楽団でバイオリンを演奏していましたので、世界中の人と一緒に生活したり、演奏したりする機会を持つことができました。そこで学んだことは、言葉が通じなくても、一緒にやり遂げられるという信念があれば、どんな障壁も乗り越えることです。この経験から、グローバルに働くことに興味をもちはじめました。

—— グローバルリーダーを目指す日本の学生へ

私は青年管弦楽団に所属するという機会に恵まれました。もしこの経験がなければ、現在の仕事をしていなかったかもしれません。単に大学の中だけで勉強するのではなく、世界とのコネクションをもつことが大切です。ただし、イノベーションを生み出すためには、グローバルに働くこと自体に価値があるわけではありません。分野横断的な多様なコンテキストの中で、自分の専門外の人たちと繋がるのが大切です。仮に日本で勉強や仕事をしていても同じです。

そして、グローバルに活躍するためには、これまでとは別の角度から世界を眺め、理解する能力が求められます。大学時代の限られた時間の中で、将来必要になる全てを学ぼうとする必要はありません。学生時代に自分を「オープン」にしていくのか、いかに可能性を広げていくのかということが大切なのです。

（文責 渋谷遊野）

注1) PISA（学習到達度調査）

2000年から3年ごとに実施されている学習到達度調査。調査対象は15歳の男女で「読解力」、「数学的リテラシー」、「科学的リテラシー」の3分野のほか、2009年からはコンピューターを使う調査も加わっている。学校で習得した内容を問う暗記力よりも、実生活での応用力を測定する。

■ OECD 学生閣僚会議

11月15、16日の2日間にわたり東京大学本郷キャンパスで開かれた「OECD 学生閣僚理事会」は、我が国の OECD（経済協力開発機構）への加盟 50 周年を記念して展開されているプログラムの一環で、OECD と GCL 等が共催して開催された。OECD への学生の関心を高め、国際機関の役割を理解してもらうことなどが目的で、OECD 加盟国等 15 カ国を代表する学生と、シェルパとして各国の学生をサポートする日本人学生、あわせて 47 人が参加した。

会議では、OECD 教育局長アンドレー・シュライヤー氏の基調講演のほか、『「育休世代」のジレンマ 女性活用はなぜ失敗するのか』の著者である中野円佳さんや、OECD 東京センターの村上由美子所長がプレゼンテーションを行い国際社会が抱える問題を学生に投げかけた。

その後、参加学生たちは、「しなやかで強靱な経済と包摂的社会 一雇用と成長に向けた人々の能力強化～拡大しつつある格差への対応～」をテーマに、2つの分科会に分かれ、ディスカッションを行っ

た。各分科会では、「男女の格差問題」や「若者の雇用問題」を具体的なトピックに据え、学生たちは、自国が抱える課題や現状を他学生に説明したり、課題解決のために求められる施策の提案を行ったりするなど、活発な討論が展開された。GCL からは、公共政策大学院修士課程 1 年の松岡広さんが参加し、事前の準備や当日のオーガナイズを含めた会議全般の運営をサポートした他、当日はチェアパーソンとして、様々なバックグラウンドをもつ学生たちの討論をまとめあげる重要な役割を果たした。

2 日目の夕方には、各分科会がディスカッションの成果のプレゼンテーションを行い、課題解決に向けた具体的提案が行われた。例えば、男女間の格差縮小に向けては、女性の役割の固定観念を変えるアプローチを進めるために、ワークライフバランスへの理解を深めること、企業幹部の女性比率を高めること、女性が働くことにインセンティブを与えるような税制の導入を進めることなどが提案された。また、若者の雇用問題に関しては、正社員として若者を雇用しやすい制度設計を行うこと、若者の能力を高めるためにメンター制度を導入すること、若者の起業を促すような法的枠組みを整備することなどが提案された。これらの成果は、報告書としてまとめられ、2015 年にパリで開かれる予定の OECD 国際会議で紹介される。

(文責 渋谷遊野)



■ TeaTimeHackathon 事前勉強会



12月6、7日に開催される Tea Time Hackathon に向けて、参加学生への事前勉強会が開催された。Tea Time Hackathon は参加者を東京大学に所属する女子学生に限定したハッカソンであるが、参加者の大半がアプリ開発初心者であるため、アイデア出しも含めた 3 回分の事前勉強会を企画した。勉強会の第 1 回目は 11 月 14 日に開催され、スポンサー企業の CyberAgent 株式会社にてアイデアソン (アイデア出しのための勉強会) を実施した。

参加者はアイデアソン前に 3 人 1 チーム、全 12 チームへと分かれた。アイデアソンにて作るアプリについてのアイデアを出したのち、勉強会後に運営チームからのフィードバックを踏まえアイデアのブラッシュアップを数日かけて行った。アイデアを先に明確化したのちプログラミングの勉強へと入ることで、学習効率を上げる狙いがある。当日はさらに、スポンサー企業より学生各チームに対して 1 名ずつ技術メンター

がついてサポートしてもらった。

続く 11 月 29、30 日には、同じくスポンサー企業である Google 株式会社の社員により Java、Android の勉強会がそれぞれ開催された。初日は Java の基本文法、クラスの話についての説明があり、最後には各自でプログラミングの課題を解く時間が設けられた。プログラミングに慣れない女子学生に対しても Google 社員、ハッカソン運営学生によるサポートが入った。初日は勉強会終了後に簡単な社内ツアーも行われた。

30 日の Android 勉強会では、Android Studio という統合開発環境を用いて Android アプリを作成する方法についての解説が行われた。

参加者は当日まで、更に作成するアプリについて詳細を詰めていき、画面構成を明確にしたうえで当日のハッカソンにのぞんだ。(文責 柴山 翔二郎)

シリコンバレーツアー



(左) スタンフォード大学のキャンパス内

(上左) デザイン会社である IDEO の入り口

(上右) ゴールデンゲートブリッジ

GCL コース生が有名 IT 企業が多くイノベーションの多いアメリカ西部へ赴き、様々な企業を巡るシリコンバレーツアーが実施されました。

スタンフォード大学

“New Trends In Open Innovation, As Seen From Silicon Valley”

大手企業がイノベーションを生むことが難しい理由として、イノベーション創出に伴う2つのリスクがある。莫大な投資の結果、技術開発が失敗に終わってしまうというリスクと、生まれた技術が市場で受け入れられないというマーケットリスクである。大手企業はこのリスクの両方が高い場合は、イノベーション創出に取り組むことができない。特に既存の市場を壊してしまう可能性を秘めている破壊的イノベーションは、組織内からの反発にも合いやすい。しかし、オープンイノベーションを活用することで大企業も破壊的イノベーションの恩恵を受けることが出来る。オープンイノベーションとは社内外の様々なアイデアや知識の流出入を利用することであり、Basic Research, Applied Research, Development という3つの段階がある。どの段階の技術の買収を行えばよいのか、最適なタイミングを見極める必要がある。スタートアップのゴールはIPOかバイアウトのいずれかであり、シリコンバレーではバイアウトがスタンダードである。スタートアップがイノベティブなアイデアを生み出し、それを大企業が買収し、自らの販売網や資源を活用して市場に届けるというサイクルが上手く回っているのがシリコンバレーなのである。

IDEO

「イノベーションを生み出すデザインシンキング」

リーンスタートアップや、オープンイノベーションなど、イノベーションを生み出す際にとれる戦略はいくつかあるが、IDEOがとるアプローチはデザインシンキングである。商品開発の過程では、価格の設定や競合分析を行う“ビジネスの視点”、新技術をどのように応用するかという“技術の視点”に加えて“ヒューマンの視点”が重要である。“ヒューマンの視点”では、新商品開発におけるエコシステムを構成するステイクホルダーを集めて話をすることでイマジネーション・インスピレーションを生むのである。このようにしてインタビューなどを通して異なるタイプ同士で話し、新たなイマジネーション・インスピレーションを得た (Inspired) あとは、それらの学んだことから共通項を見つける。これらをもつ意味・方向性をみつけて、より抽象的なアイデアへと昇華 (Synthesize) させ、その後、ブレインストームを行う (Brainstorm)。最後に、プロトタイプを使っていく (Prototype)。プロトタイプは、最初はスケッチなど非常にシンプルでラフなものから始め、少しずつ精度をあげていくべきである。デザインシンキングは「社外のインタビュー」⇒「ブレインストーム」⇒「昇華」⇒「プロトタイプ」⇒「ブラッシュアップ」という一連のプロセスであり、学び、利用することができるツールである。

(執筆 医学系研究科 M1 芝孝一郎)

AngelList

「スタートアップによるスタートアップのための環境創出」

AngelListの創業メンバーは各々がそれまでに起業家としての活動経験を持っており、煩雑な書類処理や膨大な数の面接に起業家のリソースが浪費されてしまう旧来の投資獲得活動のあり方に問題意識を抱えていた。AngelListが目論むのは、イノベーションの種となる新事業を高速に立ち上げ、新たな価値を市場に投げかけるというスタートアップの価値が最大限発揮されることが出来るような、革新的な投資プラットフォームの創出である。当社が主たる事業としている同名のウェブサービスは、エンジェル投資家(スタートアップへの投資に関心をもつ個人資産家)と起業家とのマッチングやリーガルドキュメントの処理といった投資活動やリクルーティングを支援する専門のSNSである。本サービスは単に従来の企業活動をオンライン化するのみならず、例えばオフライン面談をまるごと排除してしまう、リクルーターを排除した人材獲得の仕組みを提供する、など究極目的のために既存慣習の破壊を試みている点でそれ自体がイノベティブである。まだ20人規模の本社は、ヒエラルキーのないスタートアップらしい企業文化を重視しつつ、AngelList上で自ら投資を募って事業拡大を進め、スタートアップの新たなエコシステムを示そうとしている。

eBay

「Digital Service Efficiency を用いた企業内コミュニケーションと意思決定」

企業活動において、ある新規サービスや機能、あるいはインフラへの投資がどの程度の価値を生むのかを正確に予測し、合理的な判断を下すことは常に重要な課題である。eBayのような巨大なウェブサービスを提供する企業では、サービスの肝であるWebリクエストをさばくハードウェア資源が生命線であり、現場が握っている生の情報を迅速にマネージャへと伝達する数値指標の設計が必要である。Digital Service Efficiency (DSE) とは、eBayが採用しているシンプルな数値指標であり、消費電力あたりの処理トランザクション数を示すものである。消費電力はランニングコストをそのまま表現しており、トランザクション数と売上の価格は明確な相関があるため、本指標は収益性に見積りに直接利用できるが、一方で2つの変数はいずれも実測可能な物理数値であるため、現場での施策

との対応付けも容易であるという優れた二面性を持っている。eBayではこれまで実際にDSEを用いて有効な意思決定を行ってきた実績があり、今後eコマース以外の事業にも同様の考えを適用していきたいと考えているということである。

(執筆 情報理工学研究科 M1 鈴木良平)

GitHub

GitHub社は、「Social Coding」をスローガンに、ソフトウェア開発のためのプロダクトを提供していて、企業でのソフトウェア開発やオープンソースプロジェクトに大変寄与している。今回の視察では、主にGitHub社が提供するプロダクト「GitHub.com」「GitHub Enterprise」に関する説明が為された。これらの製品は、Gitを使用したバージョン管理ツールの機能に加えてSNSのようなユーザーのコミュニケーションを促進するような機能を持つ。この機能によって、エンジニア同士のコミュニケーションだけでなくエンジニアとマネージャーやデザイナーとのコミュニケーションも容易になる。また、GitHub Educationという有料製品を学生に無料で提供するプロジェクトを使用した販売戦略の説明も為された。GitHubを学生時代に利用していた学生は、その利便性を知っているために、企業に入社後もGitHubを使用したいと考え、就職活動における企業選びの一つにGitHubを導入しているかどうかを評価基準の一つにすることになる。そこで企業は優秀な学生を採るためにGitHubを導入せざるを得なくなるという戦略である。

(執筆 情報理工学研究科 M1 橋渡里仁)



(上) eBay 社正面の自社製品 Paypal のロゴ

(下) Github 社でのプレゼン準備風景

■ イベント告知

2015/2/27 (R2P)

Global Design Lecture & Seminar : 高齢者と看護 他

※ GCL コース生は、参加／不参加について事前登録が必要です。Web サイトからご登録ください。

● (R2P) Global Design Lecture : 「高齢者と看護」

● (R2P) Global Design Seminar : 「TBD」

<プログラム>

(R2P) Global Design Lecture —————

日時：2015 年 2 月 27 日 (金) 14:50 ~ 16:20

場所：工学部 2 号館 3 階 電気系会議室 1AB

タイトル： 高齢者と看護

講演者： 山本則子 (大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 教授)

概要： TBD

(R2P) Global Design Seminar —————

日時：2015 年 2 月 27 日 (金) 16:40 ~ 18:10

場所：工学部 2 号館 3 階 電気系会議室 1AB

タイトル： TBD

講演者： TBD (NTT 先端技術総合研究所)

概要： TBD

※現在調整中につき、決定次第、本ウェブサイト上でご案内致しますので、ご了承ください。

なお、本 Lecture の出席レポートは、GCL コース生 2 年次選抜時の参考に使います。

問い合わせ先：GCL プロジェクトインキュベーション機構 (pim@gcl.i.u-tokyo.ac.jp)

2015/3/16 Global Design Symposium : R2P/ 情報理工 & GCL 共催シンポジウム

標記シンポジウムについては、下記により開催予定です。

日 時：2015 年 3 月 16 日 (月) 13:30 - 17:30

場 所：工学部 2 号館 4F 241 講義室

※シンポジウム終了後、引き続き 18:00~20:00 に工学部 2 号館 3F 電気系会議室 1 に於いて懇談会を予定しております。(今後時間変更の場合あり)

その他プログラム・参加登録等の詳細は、現在調整中につき、決定次第、ウェブサイト上でご案内致しますので、ご了承ください。

編集・発行：

情報理工学系研究科・GCL 広報企画

(森友亮 (情報理工 D1), 荒川拓 (学際情報学府 M2), 渋谷遊野 (学際情報学府 M1), 柴山翔二郎 (工 B4), 曾我遼 (工 B4))

〒 113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学工学部 8 号館 621 号室 GCL 事務局

E-mail : pr_plan@gcl.i.u-tokyo.ac.jp